Doshisha Archives Center

同志社大学

同志社社史資料センター報

1．刊行に当たって
2．展示
3．公開講演会
4．研究活動
5．資料活動
6．写真資料整理について
7．新島襄生誕記念会
8．同志社創立記念事業
9．新島旧邸
10．ホームページ開設
11．委員会

第1号
2004年度

刊行にあたって

同志社社史資料センター
所　長　伊藤彌彦

同志社社史資料センターは、2004年5月、人文科学研究所の同志社社史資料室から独立し誕生しました。もともとは同志社創立百周年事業の一環として、『同志社百年史』および『新島襄全集』を刊行することになり、その編纂作業のために設けられた機関でした。1983年、上野直蔵総長時代のことです。その事業が一段落した後も、組織変遷を経ながら、引き続き資料収集や基礎資料類の編纂刊行、紀要『同志社談叢』の発行をつづけて今日に至りました。

さて、新島襄が同志社英学校を開設したのが1875(明治8)年11月29日ですから、今年は開学130年目にあたります。その間に新島襄関連の書簡・蔵書・遺品、同志社内諸学校の書類、会議記録、肖像画、ガラス版写真類、アルバム、寄贈資料など膨大な資料が蓄積されてきました。同志社社史資料センターは、それらの資料を収集、管理、整理し内外の研究者の方に提供することを大きな使命だと考えています。

資料保存に関しては、すでに戦前、同志社校友会・同窓会の尽力で、立派な新島遺品庫が建てられています。ただ遺品庫では収蔵品に近づきにくいという難点が生じておりました。しかし、この問題も、同志社創立125周年事業として、遺品庫の主要資料の画像33,855カットのデジタル化が実現しほぼ解決をみております。現在では世界のどこからでもインターネットで新島襄関連資料を閲覧できるようになりました。いま精力的に取り組んでいるのは、ガラス板などで保存されている古い写真の整理とそのデジタル画像への取り込み作業です。

またハリス理化学館2階にあるNeesima Roomで半年ごとのテーマ展示とそれに関連する公開講演会などの啓発活動を行っております。さらに同志社のパブリシティーを高めるべく、学内、学外への情報提供の任にあたることを仕事としてきました。このほかセンターには、旧新島研究会が主催していた研究会を引き継いでおり、この研究会のもとで毎年関係諸学校学生・生徒による新島懸賞論文の募集を実施しております。

御所の東側、丸太町通り寺町には新島旧邸があります。その蔵書はセンターで保管していますが、毎週水・土・日曜日に建物の公開を行っています。

近年、諸大学で大学史研究、大学史づくりが盛んになってきました。当センターでも今後、蓄積された資料を活用しながら大学史、学校史の研究会を推進して行きたいと考えています。

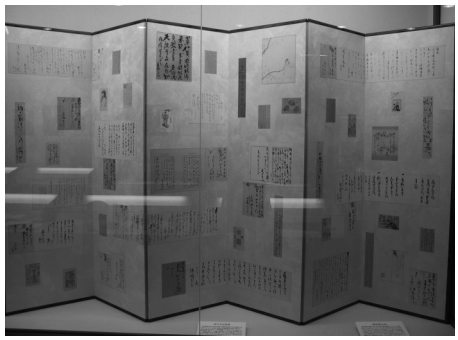
このたびは、「同志社社史資料センター報」を刊行することを通じて、当センターの活動を知っていただくと共に、同志社の歴史に親近感をもっていただく一助となればと念じております。

2005年5月

展示

2004年度は2回のNeesima Room企画展とDoshisha Spirit Week（キリスト教文化センター）および新島会館への展示協力をおこなった。

1. Neesima Room企画展



・春学期（第25回企画展）
2004年4月1日（木）～8月31日（火）
テーマ：「函館からボストンへ」

・秋学期（第26回企画展）
2004年10月1日（金）～2005年2月28日（月）
テーマ：「徳富蘇峰と熊本バンド」

2. 展示協力

（1）Doshisha Spirit Week

・春学期　2004年4月5日（月）～4月9日（金）
「新島襄の生涯」をテーマに22点のパネル展示を行った。展示内容は、「海外渡航（脱国）」、「留学時代（アーモスト大学等）」、「同志社英学校」など。

・秋学期　2004年11月1日（月）～11月5日（金）
「函館からボストンへ」をテーマに25点のパネル展示を行った。展示内容は「若き日の学習ノート」、「函館脱出のさいの扮装」、「新島襄寄港の地碑」、「ニコライ司教」、「福士成豊」、「海外渡航（脱国）」、「留学時代（アーモスト大学等）」、「旧アメリカン・ボード本部」など

（2）新島会館

「新島襄の生涯」をテーマにDoshisha Spirit Weekで展示したパネルのうち18点の展示を行った。展示内容は「若き日の学習ノート」、「海外渡航（脱国）」、「留学時代（アーモスト大学等）」、「同志社英学校」など。

公開講演会

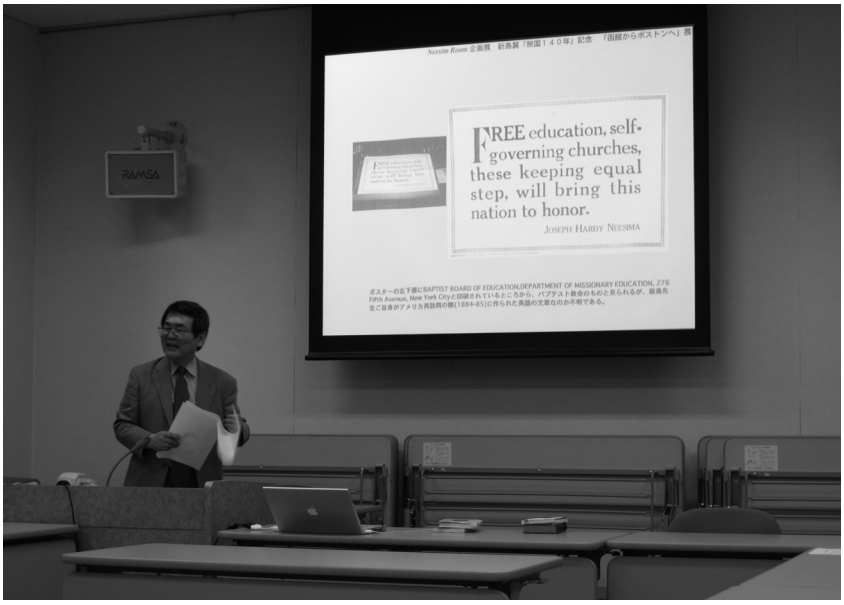
Neesima Room企画展のテーマにそって2回の講演会をおこなった。

・春学期：「函館・ボストンそして同志社」

講師：大鉢 忠氏（同志社大学工学部教授）
日時：2004年5月13日(木)
　　15：00～16:00
場所：ハリス理化学館1F会議室

・秋学期：「熊本バンド、そして徳富蘇峰」

講師：伊藤 彌彦氏（同志社社史資料センター所長）
日時：2004年10月21日(木)
　　15:00～16:00
場所：ハリス理化学館1F会議室



研究活動

第1部門研究（新島研究）の研究会や機関誌の刊行はつぎのとおりである。

1. 第一部門研究（新島研究）研究会

第50回例会　2004年4月19日（月）

・『新島研究』95号掲載論文の合評

・「同志社『良心碑』文言考 ―『良心』の出典をめぐって ―」
報告者：竹内 力雄氏
コメンテーター：北垣 宗治
司会：本井 康博

・「内村鑑三と同志社の人々」
報告者：寺崎 暹氏
コメンテーター：中森 厚
司会：井上 勝也

第51回例会　2004年5月17日（月）

・「新島襄と女子教育」
報告者：宮澤 正典氏

第52回例会　2004年7月12日（月）

・「初期同志社英学校の様相
― 主としてDOSHISHA FACULTY RECORDS (DFR) 1879-1895を通して ―」
報告者：竹中 正夫氏

夏期研究会　2004年8月7日（土）

・「新島襄と伊藤博文 ― 拙著『新島襄の交遊』（仮題）の一節の紹介報告 ―」
報告者：本井 康博氏

・「新島襄のニューイングランド体験をめぐってのコメントとレスポンス」
報告者：明楽 誠氏 ・吉永 契一郎氏

・「続・安中藩制と新島家の人々」
報告者：鏑木 路易氏

第53回例会　2004年10月18日（月）

・「英吉利文典直訳の原典および理事功程について」
報告者：竹内 力雄氏

第54回例会　2004年11月15日（月）

・「初期同志社と札幌農学校の教育理念に関する一考察」
報告者：小枝 弘和氏

第55回例会　2004年12月20日（月）

・「J・D・デイヴィス夫人の死」
報告者：森永 長壹郎氏

第56回例会　2005年1月17日（月）

・「新島襄の神学思想」
報告者：北垣 宗治氏

2. 第1部門研究　研究会会員

神学部	本井　康博
文学部事務室	朝田　邦裕
法学部	村田　晃嗣
工学部	大鉢　　忠
	山下　正和
学生課	岡本栄一郎
女子大学	吉海　直人
	小崎　　眞
高等学校	木村　良己
香里中高	中森　　厚
	富田　正樹
国際中高	山本　真司
女子中高	平松　譲二
	生田香緒里
	森　　一郎
中学校	桜井　　希
	田島　　繁
	竹山　幸男
大学コンソーシアム	松本　由利

社外	荒川　樹代	森永長壹郎
	千代　　肇	村田　貞夫
	土肥　　豊	明楽　　誠
	嶽　　冴子	中島　　覚
	行天　博志	中西　清和
	萩原　俊彦	中田　悠志
	花谷美千代	西村　四郎
	八鳥　尚志	大江　哲男
	服部　泰夫	岡安　　茂
	井上　勝也	大越　哲仁
	磯野　美和	太田　雅夫
	鏑木　路易	小野　敏也
	篭谷　次郎	坂井　　誠
	河合佐一郎	佐々岡靖元
	河合　泰子	鈴木　孝二
	北垣　宗治	友寄　隆静
	北村　洋行	外村　道昭
	児玉　実英	藪田謙一郎
	小枝　弘和	頼富　雅博
	河野　仁昭	吉田　曠二
	前迫　憲一	吉永契一郎
	松井　　全	

3. 刊行機関誌

『同志社談叢』第25号　A5版251頁　2005年3月発行

論叢	条約改正交渉中止前後における同志社大学設立運動 1889～1890（一）	宮﨑　晶行
	社会主義詩人児玉花外の研究（二）	太田　雅夫
	土倉家の人びと	本井　康博
	ミス・デントン来日の前後（一）	日比　惠子
	J.D.デイヴィスとN.G.クラークの往復書簡（2）	森永長壹郎
翻訳	「同志社の土着化」（1875～1919）（その5）	北垣　宗治

『新島研究』第96号　A5版234頁　2005年2月発行

論叢	ニューイングランド・ピューリタニズムと新島襄	竹中　正夫
	幕末-維新時における新島家の人々 ―続・安中藩制と新島家の人々―	鏑木　路易
	同志社大学設立運動と『東雲新聞』―同志社関連記事を中心に―	太田　雅夫
	新島襄と内村鑑三―内村鑑三の視点から―	中森　　厚
	『同志社大学設立の旨意』に現れた「教化」の問題 ―「同志社大学設立の趣旨」「同志社設立の始末」の比較を通して―	大越　哲仁
	新島襄のニューイングランド経験をめぐって ―シーリー、パーク、新島の福音主義の位相―	明楽　　誠
	福士成豊と北海道の地形測量	上西　勝也
	草創期札幌農学校と初期同志社の比較研究 ―アマースト大学の影響を中心に―	小枝　弘和

資料活動

1. 資料提供（写真資料を中心に）

5月 18日　『同志社時報』第86号掲載「大澤善助」写真を日本電気協会に貸出
7月 2日　「J.D.ディビスとフランシス」写真をNHKエデュケーショナルに貸出
6日　彰栄館（昭和10年頃）、チャペル（昭和30年代）、馬術訓練（昭和16年）、防火訓練（昭和16年）、太平洋戦争下の学生生徒（昭和17～18年）写真をNHK出版に貸出
22日　「同志社最初の専用校舎」写真をNHKエデュケーショナルに貸出
8月 9日　「クラーク記念館（明治30年頃、および明治中後期）」、「京田辺校地」の写真、『キャンパスの年輪』をケイキャリアパートナーズに貸出
26日　『新島襄－その時代と生涯－』掲載写真30点をミネルヴァ書房に貸出
10月 12日　「O.H.Gulick夫妻」写真について京都新聞社に掲載を許可
13日　『同志社ラグビー七十年史』をクリエイターズユニオンへ貸出
11月 12日　『新島襄－その時代と生涯－』掲載写真10点をミネルヴァ書房に貸出
12月 8日　下村孝太郎関連写真について大阪ガスに複製を許可

2005年
2月 16日　「クラーク記念館」写真を文英堂編集部に貸出
3月 25日　江口一民（奥村禎次郎）肖像写真の転載を小学館に許可
「新島襄肖像画」（湯浅一郎筆）写真の転載を岸和田市に許可
28日　山本覚馬肖像写真、山本八重筆和歌の転載を会津若松市に許可

2．資料整理

(1)新島旧邸文庫資料

2003年度に新島旧邸より移管した新島家所蔵の資料1,683冊（含、逐次刊行物）は劣化の著しい資料が多数あり保存処理が必要である。劣化・損傷の激しい資料については2年計画で専用の保存箱を作成する。初年度は949冊の資料について保存箱を作成した。

(2)新島家所蔵写真資料

社史資料センターが所蔵する新島家旧蔵写真706枚（人物写真334枚、明治4，5年米欧回覧期人物写真27枚、外国人写真220枚、その他135枚）を2003年度より2年計画で整理を行っている。2004年度は343枚の整理を行った。

(3)社史資料センター所蔵写真資料

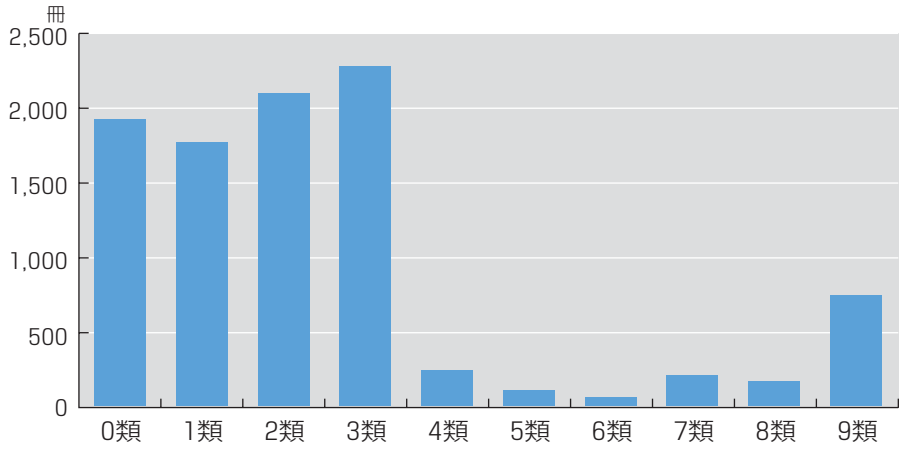
新島、同志社関係写真資料のうち1267点の整理を行った。

【S1】新島襄の個人・集合・家族各写真 ……157点
【S2】安中関係写真 ……223点
【S3】新島、板倉関係書簡等 ……171点
【S4】アメリカ時代のノート、日記、紀行 ……122点
【S5】按手礼、フィリップス、アンドーヴァー、アーモスト各時期の写真 ……129点
【S6】脱国以前の勉学ノート、留学免許状、理事功程等 ……125点
【S7】遺言、遺墨、絵画、スケッチ、遺品 ……177点
【S8】記念碑、旧宅、遺品庫 ……163点

社史資料センター網別蔵書冊数

	0	10	20	30	40	50	60	70	80	90	類合計	比率
0類	0	45	216	36	74	3	28	21	106	1,396	1,925	20.0%
1類	14	8	206	33	24	139	43	18	75	1,238	1,798	18.7%
2類	57	944	99	39	0	30	0	0	765	160	2,094	21.7%
3類	108	141	138	129	7	12	133	1,583	10	31	2,292	23.8%
4類	28	21	14	9	10	19	30	21	18	49	219	2.3%
5類	8	9	45	7	5	3	5	3	10	10	105	1.1%
6類	12	23	1	0	0	2	3	22	7	3	73	0.8%
7類	21	2	73	9	12	17	31	3	22	7	197	2.0%
8類	7	69	15	63	9	4	0	2	1	10	180	1.9%
9類	29	495	112	86	23	2	0	0	2	1	750	7.8%

総冊数　9,633冊



写真資料整理について　―― デジタルリストフォーメーション ――

同志社社史資料センター内の写真資料、とりわけ旧い大小様々なガラス乾板をコンピュータスキャナーで取り込み、一種の画像を保存してきました。つぎに紙焼き写真資料（新島襄関連、同志社諸学校、各種集合写真、各種文化スポーツ関係等）が集中的に保管されている引出し内の資料についてデジタルリストフォーメーションスキャニングを行っています。この保管庫内資料は歴代の社史資料室（現資料センター）に関係された諸先輩等により収集された資料が保管されていて、いつの間にか同種のものが重複したり、別の場所に散逸したり、また新資料のご寄贈をうけたりして、今後の資料の利用面から新たなデジタルリストの作成が課題として引き継がれてきたとのことでした。そしてこれらの作業に取り組み、作業日誌というべき八冊のメモノートができていました。これは私の資料センターでの出勤簿というべきものです。これらの作業を通してあらためて同志社に関する種々の事柄を学ぶ事ができました。

新島家の諸々のこと、創立者の蛍雪時代のこと、同志社の設立の頃のこと、新島書簡に関すること、その他現在に至る同志社の諸々の事等を学んでいます。

そしてこれらの作業をすすめる上で諸先輩方の数多くの同志社関連書物とりわけ、『新島先生書簡集』、『新島先生遺品庫収蔵目録』、『新島襄全集』、『新島襄その時代と生涯』、『現代語で読む新島襄』、『同志社山脈』、『新島襄の交遊』等の労作を手がかりとして資料のデジタルリストフォーメーションを進めています。そして新たな発見の続出で、自分の不勉強さを反省ばかりしている今日この頃です。

近年私学の独自性が叫ばれる中、同志社ほどこの種のニーズに答えられる学校は数少ないのではないでしょうか。それは創立者新島襄があまりにも明確に私学の必要性を文書化し保存され,そしてその意志が引き継がれている事からも明白であります。そしてご存じのように種々の新島書簡たるものが数多く残され、これらの中から今もいろいろな事柄を学びとっているのです。また学内諸学校の生徒手帳等のなかには創立者の遺言状、学校設立の主旨がしたためられ、教職員の生徒学生に臨む姿勢や学校の教育方針等が生徒や保護者に明確にされています。このような学びの宝庫が山積する資料を手軽に引き出せるように努力しています。

今出川キャンパスをそれなりに観てきた一人として、明治期の礼拝堂や彰栄館そしてクラーク記念館前での広々とした場所での各種記念撮影風景、竣工当時のハリス理化学館、今出川キャンパス内を走る公道石橋通、グラウンドでの軍事教練風景等が印象に残ります。そして近年では若王寺山頂での新島先生書簡集完成墓参（昭和17年5月31日、同志社新報S17.6.20号参照）のワンカットです。

新島先生書簡集完成墓参（牧野操氏寄贈）

ご存じのようにこの書簡集には592通の書簡、同志社設立の始末等が付記され、コロタイプ版資料写真31点、銅版写真資料が同じく31点挿入され1373頁数の大冊として昭和17年6月に刊行されました。驚きはこのような時期にこの大冊（豪華本）が短期間にしかも限られた編集者により編集され、それを当時の同志社校友会がこの会の事業として刊行されたことです。そしてこれを基にして同志社にまつわる学習、研究がよりいっそう進められました。

さて、学内諸学校では入学式も無事終了し、新入生のオリエンテーション等々の2005年度の学年暦が本格化してきました。どうか本年もまた生徒、学生をはじめ同志社関係者のさらなる前進の年でありますように。

山田興司（嘱託職員）

第161回 新島襄生誕記念会

日時：2004年2月12日（木）　17：00－19：30
場所：同志社新島会館大研修室

表彰

新島研究功績賞　竹中正夫
　　太田雅夫

記念講演

演題：「ニューイングランド・ピューリタニズムと新島襄」
講師：竹中正夫

新島襄生誕記念懸賞論文（2003年度）

入選者

【中学校の部】

最優秀賞　該当者なし

優秀賞　清水 優希（同志社女子中学校1年）
「新島先生の功績」
林　響（同志社香里中学校1年）
「カリスマ、新島襄」

佳作　小林 独夢（同志社香里中学校1年）
「国を想って」
樋口　友（新島学園中学校3年）
「郷土のヒーロー襄先生の魅力」
森　智洋（同志社中学校1年）
「尹東桂詩碑と同志社との関係」
山田 彩子　（同志社女子中学校1年）
「涙する新島襄」

【高等学校の部】

最優秀賞　金田 めい（同志社国際高等学校3年）
「Power of the Words—How Joe Neesima was enabled to build Doshisha—」

優秀賞　武田 佐知子（同志社高等学校2年）
「新島襄演説稿『蟻之説』について」
松尾 陽子（同志社国際高等学校3年）
「同志社の成長の理由－中村栄助を通して－」

佳作　岡田 智恵（同志社国際高等学校3年）
「新島襄の教育精神と土倉庄三郎の自然を愛する心」
白井 友紀子（同志社国際高等学校3年）
「犬と歩けば　－犬を通してみる新島襄－」
米谷 在紗（新島学園高等学校3年）
「新島襄に見る自己犠牲愛」

新島襄生誕記念懸賞論文一位入選作

Power of the Words—How Joe Neesima was enabled to build Doshisha—

3-E-13 Mei Kaneda

Have you ever thought about the origin of the word "enthusiasm"? Enthusiasm comes from the Greek meaning "inspired by God".(1) Joe Neesima was inspired by God to change Japan. During his life, he acted enthusiastically to build an institute for trained Christians in Japan. He believed that by establishing a Christian College, Japan and her people would be able to change. He was a man full of enthusiasm and passion. These feelings made Joe's words have special power. The words spoken attached with his enthusiastic feelings, moved many people to help achieve his goal. Just having more passionate feelings than others, would not have enabled him to build Doshisha. He was able to succeed by his words.

In what kind of situations did Joe's words put forth? One example is within the letter he wrote to Alpheus Hardy, "Why I Exited From Japan".(2) Joe reached Boston port on July twentieth, 1865. He boarded the 'Wild Rover' from Shanghai and Captain Horace S. Taylor took care of him during the journey. However Joe realized that he had nowhere to stay once they arrived at Boston. Not being able to find a place to stay, Joe had to spend seventy days at the Boston port alone. Fortunately, Captain Taylor was able to find a place for him to stay. He was to stay at the Hardy's residence.(3)

Alpheus Hardy was a senator for Massachusetts, and he welcomed Joe to his house. It was a wonder to Hardy why a strange young Japanese man would bother to come to America risking his life. So he asked Joe what his purpose was in coming to America. Joe tried hard to explain with his poor English, but Hardy could not understand it. So Hardy took him to a crew home and had him write it down on a paper. This is where Joe wrote the letter, taking three whole days to finish. Reading this letter, Hardy was moved and determined to help Joe in every way he could.(4) It can be said that this letter was the trigger to draw Hardy and Joe close together.

Within the letter, he wrote the reason why he departed from Japan was because he wanted to learn the culture and Christianity, and even more, see the country where Christians lived.(5) By reading his letter even once, his intense feelings of wanting to learn was evident. Also it could be seen that he already believed strongly in God more than anything else.(6) It was not the vocabularies that he used that showed his earnestness. The grammars were rather a mess due to his scarce English ability. Still his seriousness and passion was expressed clearly from the contents that he wrote.

Reading the letter, you could see how Joe was absorbed in learning new knowledge from the past. This can be seen when Joe got sick from the hard work that he was given by the prince.(7) He became so ill that he did not even want to go out from his room. The doctor had no medicine for him because it was a mental illness. So Joe decided to use his hours to rest by reading books. "I

pleased to read it so much as I would say that this book would be more better than doctor's medicine to my sickness."[8] As we can see from this quote, reading books was the cure for him. He loved to learn, and studying was not pain for him. Another time, he had problems with his eyesight's. They became weak because of studying during nighttime. Joe had to study during nighttime because he worked at the prince's office at daytime.[9] His eyes had become weak twice in Japan, and after the second time, he could not help but comment, "Ah! The study of night-time caused me weak eyes again, and I could not study at all during the time of one year and half which would not come again in my life."[10] It still would have made sense if this sentence had ended, "~during the time of one year and half."[11] Yet Joe had to write, "~which would not come again in my life."[12] to emphasize the regret he still had inside him. These incidents showed how much he wanted to learn, no matter what kind of condition he was in.

The expressions he used inside the letter were impressing too. "O Governor of Japan! Why you keep down us as a dog or a pig?"[13] "Why let us be a bird in a cage or a rat in the bag?"[14] By using animals in the expressions, we perceive that the Japanese government was not thinking about the citizens at the same level, but looking down on them as if they did not have human rights. This was the difference between Japanese and American system in those days.[15] At first it may seem to be extreme to use animals as to express the citizens, but this shows Joe's honest anger towards the Japanese government. This is the reason why he came to think that he had to change the Japanese society.

The second example is the speech that he made in Rutland, Vermont. On October ninth, 1874, Joe had a chance to speak at the Grace Congregational United Church of Christ. The 65th Annual Meeting for the American Board of Commissioners for Foreign Mission was to be held. Joe was invited to do a speech as a new cooperative missionary to Japan.[16] This was his chance to ask for contribution to build a Christian College in Japan. However his close friend Hardy warned him on the day before, that it would be difficult to ask and get money from strangers. Though hearing his words, Joe was determined to make his speech and not lose his chance, whatever the result may be.[17]

"On the following day, when I appeared on the stage, I could hardly remember my prepared piece; a poor, untried speaker: but after a minute or two I recovered myself, and my trembling knees became firm and strong; a new thought flashed into my mind, and I spoke something quite different from my prepared speech."[18] The wonderful speech that moved people's hearts was actually thought on the spot. Normally, a speech that is improvised is difficult to understand the main idea, but Joe made the point strong and clear. That is why the audience remembers the speech, and why this incident is handed down. They saw the necessity of building a Christian College from his intense speech. There is a quote by Adlai Ewing Stevenson Jr., "Words calculated to catch everyone may catch no one."[19] This quote fits for the speech that Joe had made. The speech that he made moved the people because it came from his soul and not from the mind.

“この二ドルは帰りの汽車賃にもって来たのでありますが、さきほど、わたしは、ご演説をききまして、あなたの愛国のまごころに、感激を禁じることができなかったのであります。”[20] This was what an old bucolic said, handing two dollars to Joe as he was getting off from the stage. Within this speech, Joe appeals not for himself, but for his country. He was asking for help that was not for him. It can be said that this action was why it made many people want to help more, because this action followed the Christian doctrine, “Nobody should seek his own good, but the good of others.”[21] We seek for people’s good because we are to love our neighbors as ourselves. This is rather a difficult doctrine to follow, but Joe’s strong belief in God and devotion to change Japan enabled him to do so. The sincere speech showed how much he wanted to help his beloved country.

Joe mentions that the bright future for the youths in Japan depends on the education that they get. Just improving the politics does not change the bad situation that Japan was in.[22] The educational institutions had the responsibility to raise sophisticated youths, because education relates to the root of the society. You will not know politics, technology or business without any basic knowledge. Japan needed a Christian College to send a new breeze into the heads of the stiff minds of the Japanese youths. From his speech and tears, the audience realized how much he was thinking about his country. They should have been stunned by the tremendous task that this man was facing alone. Yet by his speech, they believed that he would be able to accomplish this dream. Without any probability that he would succeed, nobody would have donated the money. However, the passion in his words was the basis of why the people determined to make a donation for the school.

Comparing these two examples, a slight difference appears between them. “Why I Exited From Japan” was practically written for his own good. Joe appealed in the letter how much he wanted to come to America and learn. However in the second example, he made a speech to ask help for his country. He spoke for the citizens in Japan to change the country into a better one.

Here we can observe the difference in his aim. When he had come to America he was thinking about himself, but when leaving he was thinking for others. He came to America determined to learn everything about this country and to read the Bible. Now when leaving, he was determined to earn the fund for the school and not go back home without achieving the goal. The subject of his aim changed 180 degrees around through the years. The person who was just thinking for him, was now thinking for the country. Though his aim changed through the years, his eagerness did not change.

It is eagerness that has always put the passion in his words. The passion inside the words that he used moved everyone’s heart. Though they may have been simple vocabularies, his feelings hidden inside caught people’s hearts. That is why Joe’s words put forth this much power. That is why his words made many people stand up and help him. He had the eagerness and passion that nobody could imitate.

It is not exaggerating to say that if it weren't for the enthusiasm in his words, Doshisha would not have been built. If he had not been able to move Hardy's heart, he would not have had the aid to go to an American school. He would also not have had the chance to learn Christianity. If he had not made the speech in Rutland, he wouldn't have been able to receive five thousand dollars to build Doshisha. Though it may be unbelievable to think that words have this much power, the proof is right in front of us. Joe Neesima accomplished each of his aims with his words. The key for his success in life was by his enthusiastic words. The power of words is incalculable. So make the most of it and be ambitious, as Joe Neesima had been.

FOOTNOTES

(1) 『ロングマン現代アメリカ英語辞典』
(2) 教材新島襄編集委員会『教材 新島襄』新教出版社, 2000, p.28f.
(3) 同書p.28f.
(4) 同書p.28f.
(5) 同書p.20
(6) Within this letter Joe says, "But after one reflection came upon my head, that although my parents made and fed me, I belonged indeed to Heavenly Father; therefore I must believe him, I must be thankful to him, and I must run into his ways." He adored God more than his family.
(新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』第7巻英文資料書, 同朋舎, 1996, p.6)
(7) Joe's family served for the prince (Itakura) in Yedo. Joe was to work at the prince's office to write the prince's daily book. (同書p.3)
(8) 同書p.4, l.25～27
(9) 同書p.4
(10) 同書p.5, l.24～26
(11) 同書 p.5, l.25
(12) 同書p.5, l.25～26
(13) 同書 p.3, l.19～20
(14) 同書p.5, l.16～17
(15) Japan consisted on feudalism back then. Feudalism is a system in which people received land and protection from someone of a higher rank when they worked and fought for him.
(『ロングマン現代アメリカ英語辞典』)
(16) 前掲書p.36f.
(17) Jerome Dean Davis, "Joseph Hardy Neesima", New York, 1894, p.32f.
(18) 同書 p.32, l.16～22
(19) Adlai Ewing Stevenson Junior was a US diplomat and democratic politician. He was the governor of Illinois from 1949~1953. This quote was used when he was making a speech at the Democratic National Convention. (http://www.quotationspage.com/quotes/Adlai_E_Stevenson_Jr.)
(20) 新島襄 『同志社設立の始末・同志社大学設立の旨意(口語改記並原文)』同志社, 1973, p.9f.
(21) 1 Corinthians 10:24 (http://www.biblegateway.com/)
(22) 前掲書 p.8

BIBLIOGRAPHY

(1) 教材『新島襄』新島襄編集委員会 『教材 新島襄』 新教出版社、2000
(2) 新島襄全集編集委員会編 『新島襄全集』第7巻 英文資料編 同朋舎、1996
(3) 新島襄 『同志社設立の始末・同志社大学設立の旨意(口語改記並原文)』, 同志社, 1973
(4) Jerome Dean Davis "Joseph Hardy Neesima", New York, 1894
(5) 『ロングマン現代アメリカ英語辞典』
(6) http://www.quotationspage.com/quotes/Adlai_E_Stevenson_Jr.
(7) http://www.biblegateway.com

同志社創立記念事業

『新島襄の手紙』(岩波文庫)の編集について

現行版『新島襄書簡集』(以下『書簡集』)には数多くの不適格箇所がある。厳密な原文・全文主義に立つ『新島襄全集』が完結したことでその不備がいよいよ鮮明になった。また『書簡集』刊行後、50年間が経過するので、その間に新たに発見された重要書簡や、『書簡集』では採用していない英文書簡を翻訳の上採録するなど、新しい編集方針のもとに「新版」として編集し2005年10月に刊行する予定である。
「新版」は、漢字ひらがな表記で、新字体を用い、補注、解題、挿図などをつけ、現代の大学生レベルの読者が読みやすい工夫をする。

新島旧邸

ボストンの友人J. M. シアーズの寄付によって建てられた新島襄の私邸で和洋折衷の木造二階建て日本人住宅として、また、同志社創立者の旧居として価値が高く、1985(昭和60年)に家具・調度類を含めて京都市有形文化財に指定された。
従来、施設部の所管であったが、社史資料センターの独立を機に移管された。

■公開日
3月～7月、9月～11月の毎週水・土・日曜日(ただし祝日、休日は除く)
5月中旬、10月中旬の連続5日間(御所の一般公開期間)
11月29日(創立記念日)

■公開時間
10：00～16：00

＜2004年度見学者数＞

4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	3月	合計
867人	696人	239人	192人	369人	258人	1434人	312人	4,367人

ホームページ開設

社史資料センターは2001年に新島遺品庫資料をインターネットで公開し（遺品庫デジタル資料公開システム）併せてNeesima Room企画展の紹介をおこなっていたが、2004年12月、社史資料センターのホームページを開設した。ホームページの内容は、センターのあゆみ、センターの活動（資料の管理、主な出版物、研究会、啓発活動、所蔵資料類）、新島遺品庫（遺品庫デジタル資料公開システムとリンク）、Neesima Room企画展（おもな展示品）、新島旧邸、センター利用案内、アクセスマップなどで構成され、社史資料センターの情報発信を行っている。

社史資料センターのホームページ	http://joseph.doshisha.ac.jp

委員会

同志社社史資料センター委員会委員（2004年度）

伊藤　彌彦　同志社社史資料センター所長
稲野　昂央　法人事務部長
白水　　勝　総務部長
田端　信廣　教務部長
森田　雅憲　企画部長
西村　　卓　人文科学研究所長
黒木　保博　歴史資料館長
鈴木　健司　女子大学
菊地　　登　高等学校
西山　啓一　香里中学校・高等学校
森　　一郎　女子中学校・高等学校
柴田　　潔　国際中学校・高等学校
竹山　幸男　中学校
本井　康博　神学部
出原　政雄　法学部
田中　真人　人文科学研究所

同志社社史資料センター運営委員会委員（2004年度）

伊藤　彌彦　同志社社史資料センター所長
稲野　昂央　法人事務部長
西村　　卓　人文科学研究所長
本井　康博　神学部
出原　政雄　法学部
田中　真人　人文科学研究所
鈴木　健司　女子大学
森　　一郎　女子中学校・高等学校
竹山　幸男　中学校
植田　　弘　社史資料センター室長

同志社社史資料センター規程

2004年4月24日制定
2004年5月 1日施行

（設置）
第1条　本学に同志社社史資料センター（以下「センター」という。）を置く。

（目的）
第2条　センターは，創立者新島襄並びに同志社関連資料の収集，整理，保存及び公開業務を継続，発展させ，同志社創立以来の歴史と伝統を後世に継承していくとともに同志社教育の充実と発展に寄与することを目的とする。

（事業）
第3条　センターは，前条の目的を達成するために，以下の事業を行う。
(1)　同志社社史資料の研究，収集，整理，保存及び公開に関すること。
(2)　新島研究に関すること。
(3)　同志社社史編纂に関すること。
(4)　『同志社談叢』の発行に関すること。
(5)　Neesima Roomの管理運営に関すること。
(6)　ハリス理化学校記念展示室の管理運営に関すること。
(7)　新島遺品庫の管理運営に関すること。
(8)　新島遺品庫の管理運営に関すること。
(9)　新島襄及び同志社建学の精神についての啓蒙活動に関すること。
(10)　その他センター設置の目的に照らして必要と認められる事業。

（所長）
第4条　センターに所長を置く。
2　所長は，学長が任命し，センターの業務を統括する。
3　所長の任期は1年とし，再任を妨げない。

（同志社社史資料センター委員会）
第5条　センターに同志社社史資料センター委員会（以下「センター委員会」という。）を置き、以下の事項について審議する。
(1)　センターの事業に関すること。
(2)　社史資料調査員の候補者推薦に関すること。
(3)　その他必要な事項

（センター委員会の構成）
第6条　センター委員会は，次の者をもって構成し，委員は学長が委嘱する。
(1)　所長
(2)　教務部長，企画部長，総務部長，人文科学研究所長，歴史資料館長及び法人事務部長
(3)　女子大学，高等学校，香里中学校・高等学校，女子中学校・高等学校，国際中学校・高等学校，中学校から各1名
(4)　学識経験者若干名
2　第1項第3号に掲げる委員は，各学校長の推薦により学長が委嘱し，その任期は1年とする。ただし，再任を妨げない。
3　第1項第4号に掲げる委員は，所長の推薦により学長が委嘱し，その任期は1年とする。ただし，再任を妨げない。
4　センター委員会は，所長が招集し，議長となる。

5　センター委員会は，委員の過半数をもって成立し，議事は出席者の2分の1以上の賛成をもって決する。ただし，第5条第2号に係わる議決は出席者の3分の2以上の賛成を必要とする。

（運営委員会）

第7条　センター委員会に同志社社史資料センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2　運営委員会は，第3条に掲げる事項について計画立案し，センター委員会の議を経てその実施にあたる。

（運営委員会の構成）

第8条　運営委員会は，次の者で構成する。

(1)　所長

(2)　第6条に掲げる者のうち所長が任命する者若干名

(3)　所長が必要と認めた者若干名

2　委員の任期は1年とし，再任を妨げない。

3　委員会は，所長が招集し，議長となる。

（事務室）

第9条　センターに事務室を置く。

2　事務室に職員若干名を置き，センターの事業，委員会に関わる事務，その他必要な事務を行う。

3　センターの事務組織は，同志社大学事務機構規程に定めるところによる。

（社史資料調査員）

第10条　事務室に社史資料調査員たる職員若干名を置く。

2　社史資料調査員は，社史資料の収集，整理，調査，企画，展示等の業務を行う。

3　社史資料調査員の選考に関する事項は，別に定める。

（事務の所管）

第11条　この規程に関する事務は，同志社社史資料センター事務室が行う。

（改廃）

第12条　この規程の改廃は，センター委員会の議を経て大学評議会で行う。

附　則

この規程は，2004年5月1日から施行する。

同志社大学
同志社社史資料センター報 第1号

発 行 日　2005年5月21日
編集・発行　同志社大学 同志社社史資料センター
〒602-8580京都市上京区今出川通烏丸東入
Tel. 075-251-3042　Fax. 075-251-3055
http://joseph.doshisha.ac.jp

表紙：新島襄自筆数学テキスト